

国際啄木学会 2026 年盛岡大会

特集 啄木・賢治の現在地

趣旨文

石川啄木と宮沢賢治は、ともに岩手県に生まれ、盛岡でその青春時代を過ごした。生まれは十年違い、直接会ったことはないものの岩手の同時代人として、同じ時代を生きた文学者として、親しみを込めて「啄木・賢治」と並び称されることが多い。今日でも、地域の新聞や雑誌、書籍、観光案内などでしばしば並べられ紹介される。また、研究の場においても、その人物像や作品が並べられたり、賢治による啄木の受容であったり、あるいは外国文学の影響を受けていることなどが比較されてきた。だが、実際のところ、両者の個性や文学の在り様は、対照の次元では捉えきれないことがほとんどなのではないか。

一方、「啄木・賢治」は、これまで繰り返し、学校教育の場に取り上げられ、現在でも教科書に載録され続けている。あるいは、戦後のある時期まで2人の人生は、児童伝記ものシリーズで繰り返し描かれ、ある種の規範的な役割を担わされてきた。さらに、今日では、いわゆる「文学史」上の「文豪」として位置づけられ、そのキャラクター性が消費されている。もちろん、それは「啄木・賢治」だけに限らないが、それにしても、彼らの作品はその死後、何度も小説や演劇、映画、音楽、ドラマ、漫画、ゲーム、アニメと幅広い媒体で取り上げられては、表現され続けている。あるいは受容、消費され続けている。

こうした翻案や二次創作は、近年ではリンダ・ハッチオンの理論に基づいてアダプテーションと呼ばれるが、アダプテーションは、その作品それ自体だけを自律的に捉えるのではなく、先行する作者像や作品を捉え直す契機となる。また、その制作の過程を問題にする（リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』2012）。多様な解釈を可能とし、新たな創造の場となる理由が、オリジナルこそにあるはずだからである。そこで生み出された作品には、時代の関心やイデオロギーが反映されるため、現代の社会や価値観について考える契機にもなるかもしれない。アダプテーションという視点を取り入れることにより、石川啄木と宮沢賢治の研究はどのような視座を得られるのか考えたい。

2026年は、石川啄木生誕140年、宮沢賢治生誕130年の節目の年でもある。この節目の年に石川啄木と宮沢賢治の現在地を明らかにし、再定義にすることによって、石川啄木研究と宮沢賢治研究の未来、岩手の未来、ひいては文学の可能性についても議論したいと考えている。